

## アミーゴ会だより

2021年1月  
通巻第45号  
季刊 2021-I

[www.mex-jpn-amigo.org](http://www.mex-jpn-amigo.org)



発行人：河嶋正之  
編集人：河嶋正之  
事務局：笠井道彦

## 新年のご挨拶

メキシコ・日本アミーゴ会  
会長 河嶋正之

謹んで新年のご挨拶を申し上げます。会員の皆さまにおかれてはご家族お揃いでお健やかに初春をお迎えのこととお慶び申し上げます。本年が素晴らしい一年であることをお祈りします。

昨年来、新型コロナウイルス（COVID-19）の猛威が全地球を覆い、人々の生活が一変しました。先ずは、新型コロナウイルス感染症で影響を受けられた皆さまに心よりお見舞い申し上げます。私たちメキシコ・日本アミーゴ会の活動も大きな制約を受けました。やむを得ず総会・懇親会やメキシコ歴史文化講演会、親睦ゴルフ会の主催、さらにはフィエスタメヒカーナ in お台場の協賛など、恒例の諸行事をはじめ各種の友好事業を延期あるいは断腸の思いで中止せざるを得ませんでした。しかし、閉塞感が漂う中でも会員交流誌としての「アミーゴ会だより」はお陰さまで年4回の発行を継続できました。ご寄稿者のご理解とご協力に改めて感謝を申し上げますとともに、会員諸兄姉の更なる積極的投稿を期待します。また、メキシコ大使館文化部による広汎でかつ時宜にかなうメキシコ情報のオンライン発信は、私たちにメキシコの折々の話題を瞬時に届けてくれました。そのご尽力に深甚の敬意と満腔の謝意を表します。



メキシコでも COVID-19 は猛威を奮っており、累計感染者は 145.5 万人、累計死者数は 12.7 万人、日々の新規感染者は平均 1 万人強にのぼります（メキシコ連邦保健省 2021 年 1 月 4 日付）。メキシコ政府は感染予防策の「健全な距離運動」を昨年 5 月末で終え、6 月以降は全国 32 州を 4 色の感染症危険警戒信号で色分けし展開可能な経済社会活動指針を示しています。2021 年 1 月 1 日現在、赤色 5 州、橙色 22 州、黄色 3 州、緑色 2 州と指定され、最大級警戒の赤色はメキシコ市、メキシコ、バハカリフォルニア、グアナフアト、モレロスの各州です。赤色指定期間は州毎に異なり当面 1 月 10 日あるいは 17 日までです。ワクチン接種は昨年末に一部地域で医療関係者向けに始まり、3 月までに 60 歳以上の高齢者向け接種を完了する予定です。他方、墨米間の陸路国境移動制限も目先 1 月 21 日まで延長合意されています。また、日本政府はメキシコを対象に感染症危険情報レベル 3（渡航中止勧告）を発出しています。新年早々の茂木外相訪墨もあり、一日も早い問題解決と自由な往来の再開を切望します。

メキシコ経済は COVID-19 の感染拡大で大幅に縮小しており、2020 年実質 GDP をメキシコ銀行はマイナス 8.7%～同 9.3%、民間 34 機関平均はマイナス 9.1%と予測しています。第 3 四半期（7～9 月）は前期の大幅落ち込み（マイナス 18.7%）から持ち直して 12.1%成長でしたが、前年同期比ではマイナス 8.6%と落ち込んだままです。厳しいビジネス環境にあっても、進出日系企業約 1,300 社は事業継続や雇用確保に向けて奮闘しています。また、ロペスオブラドール大統領は 12 月 14 日、バイデン次期米大統領に祝辞を送付し「メキシコと世界の移民への好意的な対応」での協働を呼びかけました。米新政権との関係にも要注目です。

メキシコ・日本アミーゴ会はメキシコ大好き会員の親睦と日墨両国の友好親善をモットーとするボランティア団体です。今後とも草の根レベルでのメキシコ理解の深化に役立つ活動を心がけます。幸いにも 2021 年の干支は「辛丑（かのと・うし）」で、辛は種子の中で新しい芽が生まれ出る状況を、丑は発芽時に硬い殻を破ろうとする様子を象徴することです。当会も会員のお知恵とお力をお借りして心機一転、新しい跳躍台から活動をスタートできる態勢を整えたく存じます。皆さまのお力添えを期待します。（了）

## = 目次 =

- |  |                   |               |
|--|-------------------|---------------|
| 1.新年のご挨拶   | アミーゴ会会長           | 河嶋正之 ...1     |
| 2.新年祝賀メッセージ  | 駐日メキシコ大使          | メルバ・プリーア ...2 |
| 3.私とメキシコ：「米沢の暁星 支倉六右衛門常長～2020 年は常長帰朝 400 年 3」                    | メキシコ代表            | 遠藤滋哉 ...3     |
| 4.私とメキシコ：「食の世界遺産 メキシコ料理へのアプローチ 11」                               | La Casita オーナーシェフ | 渡辺庸生 ...8     |
| 5.お役立ち情報：「メキシコから新型コロナ禍の成田入国体験記」                                  | メキシコ代表            | 遠藤滋哉...11     |
| 6.お知らせ：日墨協会支援 CF 報告 P7/メキシコ料理本 P10/テスココと征服 P11/映画紹介 P11/あとがき P11 |                   |               |

# メキシコ-日本アミーゴ会に寄せる メルバ・プリーア駐日大使新年祝賀メッセージ

**MÉXICO**

EMBAJADA EN JAPÓN



## Mensaje de Año Nuevo de la Embajadora Melba Pría para la Asociación "Amigo-Kai"

Tokio, Japón, enero de 2021

El año que termina, ha sido un tiempo complicado y lleno de retos para todo el mundo. Tanto en México como en Japón, seguimos luchando contra la crisis sanitaria global, que ha obligado a la humanidad a replegarse y a encontrar nuevas maneras de comunicación y de contacto.

2021 se nos presenta lleno de incertidumbre pero también con un rayo de esperanza. Definitivamente, hay muchas lecciones que tenemos que seguir aprendiendo para adaptarnos a la nueva normalidad de un mundo post-pandemia. Pero de entre ellas destaca la importancia fundamental de la solidaridad y la unidad para poder enfrentar los retos que se nos presentan.

Las difíciles circunstancias de 2020 han llevado a que muchas actividades, incluso aquellas que ya se habían hecho tradición, tuvieran que interrumpirse. Tal fue el caso de la Fiesta Mexicana en Odaiba, que gracias al apoyo entusiasta de los miembros de Amigo-kai, se ha convertido en uno de los más importantes festivales de cultura mexicana en Japón.

Como Embajadora de México en Japón, quiero manifestar a todos ustedes el reconocimiento y aprecio por su continuada relación de amistad y cariño con nuestro país. A través de los años, la Asociación de Amigos México-Japón "Amigo-Kai", sigue siendo un ejemplo constante de como los lazos entre las personas constituyen la base más firme y sólida de la relación centenaria entre nuestros dos países.

Al iniciar un nuevo año, en el que está cifrada la esperanza de la humanidad para un futuro mejor, en nombre de todos quienes formamos parte de la Embajada de México en Japón, les expreso nuestros deseos de salud, paz y prosperidad a todos los integrantes de Amigo-Kai. Esperamos que 2021 nos traiga muchas oportunidades de continuar colaborando para impulsar más el entendimiento y la amistad entre los pueblos de México y Japón.

Atentamente,

Melba Pría  
Embajadora



メルバ・プリーア大使

拝啓

2021年1月 日本国東京

昨年は世界中にとって困難と数々の課題に満ちた年でした。今なお、メキシコだけでなく、日本でも、世界的な感染症拡大の危機と直面しています。それゆえ、人々が外出を控え、新たな意思伝達や連絡をはかる方法を模索することを余儀なくされています。

2021年も引き続き先行きが不透明でしょうが、ひとすじの希望も見えています。当然ながら、ポストコ

ロナ時代の新常態に対応すべく、新たに学び続けなければならないことがたくさんあります。しかしながら、そのなかでも、私たちが直面する課題を解決するには、団結し調和することが非常に大切であることに変わりはありません。

昨年2020年はさまざまな困難な状況により、多くの活動を中断せざるを得ませんでした。「メキシコ-日本アミーゴ会」の会員諸氏の意欲的なご協力のおかげで、日本でメキシコ文化を伝える最も大切な恒例行事のひとつとなっている「フィエスタ・メヒカーナ in お台場」も例外ではありませんでした。

駐日メキシコ大使として、「アミーゴ会」の皆様方に謝意と敬意をお伝えしたいと思います。長きにわたり、皆様方が我が国メキシコに友情と親愛の念を抱いてくださり、両国の絆としてたゆまぬ模範でありつづけ、長年の確固たる友好の基礎を築いてくださっていることに感謝を申し上げます。

新年を迎えるにあたり、人々がみなよりよい未来を希求するなか、在日メキシコ大使館の全職員より、皆様方のご健康、安泰、ご多幸をお祈り申し上げます。2021年は、日本メキシコ両国民の相互理解および友好をさらに深めるために、共に活動できる機会が多い年でありますようお願いしております。

メルバ・プリーア  
大使

(メキシコ大使館訊)

## メキシコ料理へのアプローチ

メキシコ料理店 La Casita  
オーナーシェフ 渡辺庸生

日本におけるメキシコ料理のパイオニア La Casita(ラ・カシータ)のオーナーシェフ渡辺庸生さんに、ユネスコ食の世界遺産に指定された多様なメキシコ料理文化の真髄を縦横無尽に語っていただきます。どのようなお話しが飛び出すか毎号のお楽しみです。La Casita の HP : <http://www.lacasita.co.jp/menu/sugerencia/index.html> (編集部)

## 第 42 章 トルティージャ再修業 5 年の優等生

2009 年の 10 月の頃だった。一人で来店した男性客から「全部、美味しいです。感動しました」と話しかけられた。年の頃なら 40 歳手前くらいの彼は、「シェフの本も購入してチャレンジしていますが、中々上手く出来ません。少しお話を聞きたい」と興味津々の様子だった。難しく書いたつもりは無かったが、唐辛子を焼く、揚げる、炒める等の最適の状態を見極めるには、私と共に調理しないと、やはり読むだけでは把握出来ない主旨の説明をした。恵比寿の読売カルチャーで毎月教えているので「来ますか？」と誘ってみたところ、「有難うございます。伺います！」と嬉々として店を後にした。

翌月、教室に顔を見せた彼は、調理工程だけでなく、食材が持つ特性、メニューの時代的背景、地域性等の講義を真剣な表情で聞き入っていた。教室の度に夜は奥様と共に店で食事を楽しむ彼が、ある日、口にした言葉には驚いた。「実は僕、JR 静岡の駅近くで長くメキシコ料理屋をやっています。先生の料理に出会ってから、自分のスタイルはアメリカのだと気付きました。是非、シェフの味を修得して提供したいと考えています。如何でしょうか?」。何と、毎月新幹線で通っていたのである。この申し出には私のほうが感銘を受けた。その夜は徹底的に伝授する方向で約束は固まり、これからのメキシコ料理に掛ける強い思いを、如何に顧客を啓蒙し、対応して行くかで話題は盛り上がった。

教室は本来、調理はデモンストレーションだけで良いのだが、トルティージャの生地だけは手が覚えないとダメなので、毎回、彼ともう一名を指名して一緒に

練ることにした。硬粒種のとうもろこし粉の隣にある消石灰に少量の水を与え、粉全域にその成分が拡散するまで一切水分を加えない。ただ、ひたすら手を動かし、かき混ぜてゆく。すると食材が持つ良い香りが漂い始め、段々と全身が香りに包まれるような状況が生まれて来る。ここから少しずつ水を足しながら細かい粒を作り、更に水分を加えると、それらが寄り集まるようになる。ここからが練りに移行する瞬間である。

練り上がった生地はしっとりとしなやかで、光沢を放っている。最初は戸惑っていた彼も、一年を過ぎる辺りにはしっかりと出来るようになっていた。トルティージャを完全克服した後も通い詰める中、14 年間営業した静岡の店を閉じてしまう快挙に出た。友人がやっている六本木のタコス専門店でも、しばらくトルティージャとサルサの類を指導しながら経営実務、業者対応を学んでいた彼も、ようやく踏ん切りがついたのか、先日、「もう一度、静岡で出直します」と挨拶に訪れた。新たに厨房を構えて「先生の味を基盤に、美味しい皿を提供します」と、晴れ晴れとした表情で決意と夢を語ってくれた。

彼の名は坂田晋也。5 年の長期にわたって教室に通ってくれた優等生である。健闘を祈るばかりである。



## 第 43 章 イタリアンの俊才と料理の鉄人対決

2019 年 3 月中旬、突然の訃報が入って来た。「料理の鉄人」で対決した神戸勝彦氏の死である。伝え聞くところに寄ると、高所で仕込み中に転落したとのこと。余りの衝撃に声を失い、しばらく呆然としていた。

この 20 年、彼が恵比寿に店 (MASSA) を構えてからは、お互いが訪ね合う機会が増えていた。私が予約を入れると燃えるのか、定番のコースだけで無く、即興で幾つかの皿を調理してその実力を示して来る。「パスタのプリンス」と異名を取っただけに、その表現は多彩の極みで、特に和野菜類を絡めたそれらは、食材の個性を見事に引き出して感服した覚えが何度もある。

最後にお逢いしたのは、渋谷の有名ホテルで 19 年ぶりに開催された「料理の鉄人、同窓会」であった。これまでの歴代の鉄人、100 名を超える挑戦者、番組ス

タッフ達が揃う会場は熱気に包まれていた。鉄人達が自慢の料理を持ち寄り、陳さんの御子息が得意のメニュー類を振舞う宴 (うたげ) は豪華で贅沢な時間だった。これだけの料理人が集うのは稀なこと、彼方此方 (あちこち) で談義に華が咲いていた。全員で記念写真を撮り終えた帰り際、近寄って来た神戸さんは「さっき二人で撮ったツーショット、ラ・カシータに展示してある対決当時の写真の横に並べて欲しい。あの頃は 20 代後半、もうこんなに歳を取っちゃった」と笑っていた。あの時のはにかんだ素敵な笑顔が今も忘れられない。

思い返せば、この番組の審査員達はとても厳しく、時には辛辣な批評を口にしていて、とても恐い思いを感じていた。毎週のように見ていたが、判定の試食の際には、双方に緊張が漂う雰囲気があった。各審査員

の持ち点は20点。内訳は盛り付けが5点、創造性が5点、そして味が10点である。辛口の審査員の評価は毎週、13~15点が大半を占めていた。いざ自分が戦いの現場に立った時、心に命じたことがある。前者2つは1点ずつ負けても、味は負けたく無い。全身全霊で立ち向かう覚悟で勝負に望んだ。終了1分前に6品を完成させた直後のインタビューで、「鉄人には勝ちましたか？」の質問に、「相手の調理は見えなかったので分かりませんが、マンゴーには勝ちました」と答えたコメントが素晴らしいと、しばらく店の顧客達の話題となったのを覚えている。

#### 第44章 絶品チラキレスとの遭遇—私の出発点

「もう、本国へ行くしか無い」。そう心に決めたのは1973年、春の頃だった。特に当てがあった訳では無いので、回りの友人達は心底、心配をしてくれた。

ガイドブックも無い時代、情報は米国の映画やTVドラマに登場するメキシコ人の姿だけだった。映像に映る彼等は皆、貧しく、トルティージャを齧(かじ)りながら、粗末な惣菜を食べていた。又、衝動に背中を押されて、その地へ旅立つ行動に、呆れてもいた。

現在(いま)でこそ、与えられた役割だと理解しているが、当時は未来への展望どころか、明日さえ見えていなかった。頼りは、メキシコ大使館で得た20軒程の飲食店リストだけだが、仕事に就けなくても、取り敢えず本物の味を確認したかったのである。神戸の店ではトルティージャは缶詰、調理はチリ・パウダーを多用していた。そこで遭遇したメキシコ人達は店の料理を全否定し、口々に自国の料理の素晴らしさ、美味しさを力説したのである。

いったい何が違うのか、体験する事に意義があった。羽田空港を飛び立った飛行機の機内で、メキシコの情景をイメージしていた。小さな村があって、サボテンが回りに乱立、麦わら帽をかぶった村人がテキーラを片手に座っている。そんな風に思い描いていたその頃の自分を思い出すと、今更ながらに恥ずかしくなる。機はカナダ・バンクーバーを経由して、メキシコシティ空港(現ベニートフアレス空港)へ一路、向った。入国手続きを終え、外に出て見た光景には驚愕の一言だった。高層ビルが立ち並ぶ街に高速道路、地下鉄が整備された大都市なのである。想像を遥かに超えていた。時は1974年初頭、20代半ばの私はカルチャーショックを受けていた。

#### 第45章 異端の調理服—赤からオレンジへ

メキシコ伝統料理の名店「CABALLO BAYO」の厨房では沢山の婦人達が要の部署を任されていた。鶏や肉、海鮮のブイヨンを取り、献立のスープを調理、トルティージャを手焼きして焼き立てを提供する姿は自信に満ち溢れていた。和食に例えると、旨い飯を炊き、昆布や鰹節の出し汁をひいて汁ものを作る板場の仕事。昭和の時代の料亭では有り得ない光景だった。



考えてみれば、メキシコで数千年に渡り培われて来た食文化は、全て母親達の役目だった。メタテ(Metate)と呼ばれる火山石で作られた石臼

結果発表で私の判定は18点、何と神戸さんは20点!フジテレビから後に出版された『料理の鉄人、大全』の中で、神戸さんは「自分の料理で一番出来が良かったマンゴー対決が印象深い」と語っている。

「MASSA」の開店祝いで伺った折、渡辺さんとの戦いが一番熱く燃えたと吐露してくれた。お互い、食材に向き合う姿勢に共感を覚えていたのかも知れない。享年49才。奇しくも私が対決した時の歳である。まだまだこれからの調理人生があったはず。イタリアンの俊才、神戸勝彦。残念無念だが、ご冥福を祈るばかり。

翌日、中心街で初めて口にした料理は感動の嵐だった。とうもろこしの香りと旨味、程よい甘味のトマトソースに漂う微かな唐辛子の後味、盛り込まれた鶏肉、風味豊かなチーズの絶妙なバランス、トッピングのオニオンのシャキシャキ感、正に絶品だった。その時の衝撃は今でも鮮明に覚えている。



その名はチラキレス(chilaquiles)。残ったトルティージャを4等分に切り、ラードで揚げたものをボイルした鶏肉、チーズと共にランチュラソース(優しいチレ味のトマトソース)で煮込んだものだが、メキシコ全土に根付いている伝統惣菜である。日本食に例えるなら雑炊だろうか。残ったご飯を出汁と具材で煮る形態が、食材は違えど共通しているのである。澱粉がアルファ化した炊き立ての白飯の美味しさが、焼き立てのトルティージャに匹敵するとすれば、お冷ご飯はベーター化した旨味の代物。冷めた残りのトルティージャの調理例としては妙案である。

長きに渡る私のメキシコ調理人生はこのチラキレスとの出会いを基点として歩き始めたのである。その後、この料理にも様々なアレンジがあるのを知る事になるが、あの時の感動の味を忠実に再現した店のそれは、多くの顧客を魅了し、ラ・カシータの看板メニューとして定着している。

に茹でたとうもろこし粒を置き、マノ(Mano)と呼ばれる石棒で押し潰すように練り込んでゆく作業は、重労働だが現在も各地に受け継がれている。

当時(1974年)、我が国では「厨房は男で仕切るもの」とされた私の社会通念は見事に覆(くつがえ)されていた。又、常識に捕らわれず、伝統料理の本質を追い求め、本来のクオリティを実現する配役に感動すら覚えていた。この出来事が切っ掛けとなり、日本の料理人達が持っている慣習や決め事に疑問が生じ始めてゆく。果ては趣味、服装、社会的立場等、様々な基準にまで思いを巡らせていた。ガブリエル料理長以下、にこやかに全員が一丸となって仕事に勤(いそ)しむ

状況は、上下関係の厳しい日本では考えられなかった。

帰国後、1976年夏、渋谷公園通りにラ・カシータを開業する際、コック服は真っ赤と決めていた。

西洋料理界に於てフレンチ以外は真面（まとも）に認められていない時代、特にメキシコ料理は多大な偏見を持たれていた。情熱がほとぼしる気持ちをぶつけるには赤が最適だった。白で同列に並んでは相手にならなかったのである。奇を衒（てら）うつもりは全く無かった。むしろ、白が基調とされている業界に挑戦したかったのである。美味しさが評判になる中、取材も増え、真っ赤な調理服も好評だった。ただ12月も半ばを過ぎるとサンタクロースに間違えられたり、酔っ

払いに「おい、とんがらし！」と絡まれることもあった。

代官山、旧山手通りに移る時に、赤と夢と希望を加えると「オレンジ」かなと勝手に解釈して作成したものが現在も続いている。スタッフ達も最初の頃はとまどいもあったのか、買い物の度に照れてはいたが、妙なもので仕事が出来ようになってくると、オレンジ色が板に付く。

あれから40年余、料理界には黒、水色、縦縞等の例外も増えては来たが全国、未だにオレンジは採用されていない。料理人にとっては格闘技のものと同じ勝負服。毎日、袖を通す度に気合が入る。

## 第46章 世界無形文化遺産のメキシコ料理

2010年、ユネスコは初めて3つの国の食文化を無形文化遺産に取り上げた。フランス、地中海、そしてメキシコである。当初、日本のメディアはNHKがフランス料理だけを番組にしたぐらいで、他の各局は話題にさえしなかった。無視同然である。知って欲しい事柄だけをつまみ上げる報道姿勢に憤りを感じていた。

テレビ東京のBS局BS JAPANのディレクターから世界遺産の番組を制作するので、メキシコ料理についてレクチャーをお願いしたいと連絡があったのは、一年後の秋の頃だった。嬉しかった。ようやく腰を上げてくれた事が。数日後、店を訪れた5人のスタッフ達、担当責任者のディレクターは「メキシコは皆目解りません。どこに焦点を絞っていいのか教えて頂きたい」とお手上げ状態だった。

全体像を知ってもらおうと、日本の5.2倍ある国土の各地域に培われ、根付いた、6千年にも及ぶ食の軌跡から話を始めていた。個性豊かな唐辛子の類、香味野菜との妙味溢れる調和、独創性に満ちた調理法、そしてそれらが一体となった素晴らしい味の成り立ち。

話したいことは山ほどあった。興味深くノートを執る彼等は真剣そのもので、講話の内容は増し、気が付けば3時間の時が過ぎていた。ディレクターから注文があったのは、要（かなめ）のロケ地を3ヶ所に決めたいとの要望だった。

訪墨する女優の黒木瞳さんの友人がいるメキシコシティは外せないとの事情なので、私の師匠の店である

「CABALLO BAYO」とソカロの近くのラグネージャ市場を推奨した。あとの2つは難しかったが、やはりメキシコ料理の代表格モーレ発祥の地プエブラの名店「Fonda de Santa Clara」と七色の色彩を放つモーレの産地オアハカに決めた。スペイン人の攻勢にも屈し無かった先住民の末裔達が守り通している「オアハカの味」も体験して欲しかった。

番組のタイトルは「黒木瞳が行く食の世界遺産、メキシコ料理の源流を訪ねて」と聞かされた。ようやくメキシコ料理を真正面から捉えた取材がスタートする。しばらく逢っていない師匠のガブリエルに手紙を書こうと思った。勿論、カバージョの味は期待を裏切らないが、数千年もの伝統に刻まれたメキシコ食材の魅力と調理を思う存分見せ付けて欲しいと便箋に綴り、ディレクターに手渡していた。彼等も確かな手応えを感じたのか、自信を持った表情で「しっかりと撮影して来ます」と店を後にした。

2012年2月13日の夜、放映された内容は満足のゆくものだった。驚いたのは、普段ダイニングの部屋に出ない師匠が、自ら伝統サルサの類を調理、解説してくれているシーンの連続場面である。師匠の優しさが十分に伝わって来て、手紙でお願いをした言葉に答えてくれた友情には感謝この上無い思いだった。

<次号へ続く>

【編集部注：各章の見出しは編集部によります。チラキレスとmetate y manoの写真は編集部がウェブより選択貼付。】

\*\*\*\*\*

### 私の本棚

#### 『魅力のメキシコ料理』

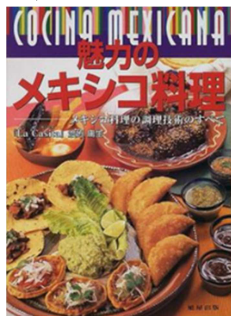
～メキシコ料理の調理技術のすべて～

渡辺庸生シェフ執筆のメキシコ料理の秘伝書をご紹介します。

商品説明：海老のんにく炒め、若鶏のメキシカンソース…。前菜、スープからデザート、コーヒーまで、タコスだけではない多彩なメキシコ料理のレシピ集。メキシコ料理のあるべき姿を、現在の日本で再現できる限りの形で紹介する。

著者：渡辺庸生。1948年神戸生まれ。1974年メキシコに渡り現地レストランで2年間修行。その後レストランLa Casitaを開店。他に「本格メキシコ料理の調理技術タコス&サルサ」(2008年、2,750円税込)。

書誌：2002年旭屋出版刊。価格2,750円(税込)。



### 私の本棚

#### 『メキシコ料理大全』

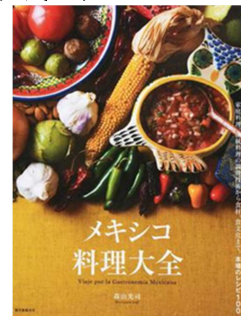
～伝統料理の調理技術から食材、食文化まで～

もう一冊、メキシコ料理の奥義書です。併せてお楽しみください。

商品紹介：メキシコの一般的な定番家庭料理から、季節の特別料理、各地の伝統料理まで、日本でも再現可能なレシピ100を厳選掲載。作り方や食材、その背景となる歴史や食文化についても詳しく紹介。食材や食器、織物なども網羅。

著者：森山光司。1965年生まれ。広島県出身。メキシコ市クラウストロ・ソルフアナ大学ガストロノミーコース卒業。麻布のレストランSalsita(サルシータ)のオーナーシェフ。

書誌：2015年誠文堂新光社刊。価格3,080円(税込)。



## 米沢の暁星「支倉六右衛門常長」

～2020年は常長の帰朝400年～

メキシコ・日本アミーゴ会  
メキシコ代表 遠藤滋哉

激動の令和元年、2020年はメヒコとも縁が深い「支倉六右衛門常長」が元和六年（1620年9月20日）故国、仙台に帰郷して400年となります。この節目の年に今一度、常長が太平洋と大西洋の2つの大洋を越えて成就した「慶長遣欧使節」を振り返ってみたいと思います。

## 答礼大使セバスチャン・ヴィスカイノの来日

次に登場するのはセバスチャン・ヴィスカイノ<sup>(註)</sup>。アベルーサ一行を手厚く保護して新造船まで与えてくれた家康に対し、ノヴィスパンの副王（総督）ドン・ルイス・デ・ヴェラスコ・イ・カスティージャは返礼大使として、老練な航海士のセバスチャン・ヴィスカイノ（ウエルヴァ生まれ＝スペイン南部ポルトガルとの国境付近）を任命派遣します（当時61歳と思われる）。



ヴィスカイノ肖像

注：ヴィスカイノはノヴィスパン副王の命によりアメリカ西海岸カリフォルニアの探索、調査に功績があった。モンレー、サン・ディエゴ、サンタ・バーバラなどの地名を名付けた、また、コクジラの生息地で知られるカリフォルニア半島“ヴィスカイノ湾”にその名が残る。

その表向きの理由は正に答礼、国王フェリペ三世からスペイン船乗員の救助に対する感謝状と借金の返済、そしてお礼の品として当時珍しいスペイン製の置き時計（＝フェリペ二世のお抱え時計技師・ハンス・デ・エヴァロ《フランドル人》が作成したもの、1581年の刻印がある。＝現在重要文化財として静岡県久能山東照宮博物館に保管されている。）が献上されました。

しかし、スペイン本国政府及びノヴィスパン総督府の真の目的は徳川幕府のキリスト教に対する新たな政策方針の確認とマニラからの帰路で海難に遭遇した時のスペイン船の避難港の確保、それに伴う日本沿岸の調査測量、海図の作成、そしてポルトガル船が見たと伝えた日本の東方（北緯37度2分の1）に有ると言う「金銀島」の極秘の探索でした。この時68歳になる家康は最初沿岸の測量調査に許可を出していましたが、

懸案の「銀の精錬技術＝アマルガム法」供与の回答が無く、アベルーサと約した鉱山技師の一人の同行も無かった、また、ヴィスカイノが敵国オランダ、イギリスを悪し様に罵る傲岸不遜な態度を不快に思い、次第に冷たく接するようになります。

さらに、「ブエナ・ヴェントゥーラ号」でアベルーサと共にノヴィスパンに渡航した京都の商人田中勝介、朱屋隆成、山田助左衛門等の一行22名もヴィスカイノの乗船「サン・フランシスコII号」で帰国しました。勝介は直ぐに駿府の家康に航行中の操船技術や（実際は水夫たちが教えるはずもない、視認のみ）ノヴィスパンの様子を報告したので、家康もカトリックの布教のみを望み、日本との通商交易に後ろ向きなスペイン本国の思惑を感じ取ったはずで

測量調査の許可を得たヴィスカイノ一行が越喜来湾（おきらい＝現・大船渡市三陸町越喜来）を調査中、村人たちが皆、山に向かって逃げていくのを目撃、「自分たちの南蛮船を恐れてか？」と訝っていたところ突然、巨大な波が三回も押し寄せました。三陸地震による慶長大津波でした。慶長16年10月28日（1611年12月2日）の事でした。

この津波で伊達藩内で溺死者1783人、南部、津軽の海岸でも人馬の溺死は3千余人、北海道の南東海岸ではアイヌの溺死者も多かったと記録に残っています。（天の気まぐれなのか、400年後の現代に再び大地震と大津波が襲ってくるとは…!?. 誰れ知る由もありません。）

## 異才の宣教師ルイス・ソテロの野心

ここに一人の日本語を巧みに操る、異才の宣教師が登場します。彼の名はルイス・カブレラ・イ・ソテロ<sup>(註)</sup>。1603年にフィリピン総督アクーニャの命で来日したフランシスコ会の宣教師で、スペインの貴族階級の生まれです。後に政宗と図って、自身が正使、常長を副使としてノヴィスパン総督府を踏み台に、スペイン国王、ローマ教皇にも誼を通じようと目論む、聖職者には珍しい野心家でした。

注：1574年（天正2年）、父ドン・ディエゴ・カバジェーロ・デ・カブレラ、母ドニャ・カタリーナ・ニーニョ・デ・ソテロの第2子としてアンダルシアのセヴィージャに生まれ

た。父方カバジェーロ族がコンヴェルソ（ユダヤ教徒がキリスト教に改宗した者）でユダヤ人の血を引いていたのを不名誉と思い、母方の姓「ソテロ」を名乗った。

さて、政宗が造る洋式帆船「サン・ファン・パウテイスタ号」ですが、ヴィスカイノは来日まもなく、1611年6月22日に将軍秀忠に謁見します。その2日後、江戸城下で伊達政宗の行列に遭遇、その時政宗は籠から降りて丁寧に挨拶をしたと云います。通訳のソテロを交えて三者が初の顔合わせの場面です。

この日6月24日が聖サン・ファン（San Juan）の祭日＝イエス・キリストの先駆者とされた洗礼者聖ヨ

ハネ（西語：ファン）の生誕日だったことから、建造した奥州丸（陸奥丸＝むつ丸）を「サン・ファン・パウティスタ（洗礼者）号」と命名したと伝えられています。

ヴィスカイノーは金銀島の探索中に嵐に遭遇して自身の船を失い（1612年11月7日）、好まざる事態の結果、不本意ながらソテロ率いる「ノヴィスパン派遣船」で帰国することになります。その目的のため、政宗からの申し出もあり（1613年3月）、政宗船の建造に参画し、ヴィスカイノー自身とその配下が操船を担当する能力を最大限に吹聴して帰国の実現を図ります。

さらに、あまり知られていないことですが、「慶長遣欧使節」出帆の前年に、家康自身が幕府とノヴィスパンの直接貿易を目論んで、ヴィスカイノーの帰路に「サンフランシスコⅡ号」に随伴する僚船として新たに西洋式帆船の建造を船手奉行の向井将監忠勝に命じています。この船は「サン・セバスチャン号」と名付けら

れ、1612年10月に浦賀湊を出航しました。宣教師ルイス・ソテロを大使として他に伊達藩の家臣2名が乗船していたと記録にあります。（そのうちの一人は「常長」だったかもしれません？）

もし、幕府の交易船（サン・セバスチャン号）の渡航（1612年10月3日）が成功していれば、「サン・ファン・パウティスタ号」の建造（1613年4～10月）とノヴィスパンへの渡航は計画されなかったことでしょう。しかし、「サン・セバスチャン号」は出港した直後に暴風に遭い、座礁沈没してしまいます。同じく日を経ずして、ヴィスカイノーの乗船「サンフランシスコⅡ号」が大破して航行が不可能になってしまった事は前に触れました。このことが、幕府主導のノヴィスパンへの使節派遣を家康が断念し政宗に託した大きな要因の一つであったと推測されます。

いよいよ主人公の常長登場です。

### 運命の人・支倉六右衛門常長

常長の渡欧までの生き様はあまり知られていません。本節は、残る資料がごく僅かしか無く、多くの研究者が感じている疑問です。

政宗はこの伊達藩の浮沈を賭けた遣欧使節の総大将に、何故「常長」を抜擢したか？の謎です。

一般に謂われているのは、

- 1) 常長は伊達家家臣の中で、家格が170番目の600石取りと身分が低かった（これが政宗の深謀遠慮です）。
- 2) 常長は知的で武将としての資質も優れ、外交交渉の能力を備えていた（身分の高い家臣が優れた資質を備えているとは限らないのは、今も同じですね）。
- 3) 困難に対峙しても沈着冷静に対処する能力を持っていた。当時の大洋を渡る航海は苛酷で死の危険を伴うものでした。

また、政宗はソテロの献言で奥南蛮（スペイン、イタリア）まで使節を派遣して徳川家から覇権奪取のためスペインの軍事支援を乞う野望があったとしても、この企みが幕府に露見した時の言い逃れの布石として身分の低い家臣（常長）を選んだのではないのでしょうか。その場合に「下級家臣の不始末」として処分しても言い訳となりうる身分の者、俗な言い方をすれば将棋の「棄て駒」として適材だったと云うことでしょうか。

支倉常長（長谷倉長経）は、政宗の父で伊達家16代の輝宗の家臣山口飛騨守常成の次男として、米沢在郷の「関の立石」に1571年に生まれました。父常成（つねしげ）は信夫郡山口邑（現・福島市）に封ぜられていましたが、輝宗の命により1568年に関・立石郷に移住しました。常長は幼名を「與市」また自身の名を「六右衛門」と名告りました。

1577年、伯父で男子の無かった支倉時正・紀伊守1200石取りの養子となり、関で7年ほど幼年期を過ご

します。1596年養父時正の後妻に男子二人が誕生（義弟＝久成、常次＝新右衛門常次は帰朝した後の常長の世話をしたため、後に政宗の仕置により六右衛門は支倉の分家となります）。

六右衛門は子供の頃、どんな時にもムツと唇を結んで泣かぬ子だったと地元で有名でした。長じてからは一見柔和で気が長く、所謂「沈毅」といった型の東北人らしい粘り強さを有していたと評されていました。

1592年（文禄元年）、老耄の秀吉が起こした文禄の役に養父支倉時正と共に朝鮮へ出陣を命ぜられます。この時、六右衛門は御手明衆（おてあけしゅう＝伊達家臣から政宗が選んだ「特別な命令を遂行する」ための先鋭部隊）20人の一人として政宗に従い渡海し、戦功をあげました。

さらに深読みをしてみます。

常長29歳の時、養父（時正）と実父（常成）は親族間の領地争いを起こし、その罪で1599年に支倉家は閉門となり、1601年実父常成は切腹を命じられました（鍋丸事件）。当時の処罰は一門連座で常長も領地召し上げ、追放処分を受け7年余り不遇の時期を過ごします。

しかし、先に触れた文禄（1592年）・慶長の役（1597年）に参戦した政宗の下での常長の活躍と武功に報いるため、政宗は1608年、赦免の処置として常長に支倉家の再興を許し、下胆沢小山（しもいさわおやま＝現・奥州市）に知行600石の新領地を与えます。この件が政宗の脳裏にあり遣欧使節大使の人選に影響したかも知れません。

政宗は常長を抜擢することで支倉の汚名を雪ぐ機会を与え、「余に報恩忠勤せよ！」と望んだとも云えます。結果的に下級家臣の中から常長を取り立てた政宗の慧眼は驚嘆に値するものでした。

### 支倉六右衛門常長の光と影

「両雄並び立たず」の故事ことわざがありますが、この「遣欧使節プロジェクト」の役者は5人も6人も登場します。フランシスコ会の宣教師ルイス・ソテロが家康の大使としてノヴィスパン、さらにスペイン本

国へ派遣されると知って、快く思わないアベルーサは豊後臼杵に漂着修理していた僚船の「サンタ・アナ号」の乗船を断り、家康が申し出たアダムスが建造した2隻目、120トンの「ブエナ・ヴェントゥーラ号（和名・

按針丸)で帰国する決心をします。アベルーサとの交渉に期待を持っていた家康はアベルーサの献言を容れ、ソテロに代えて同じフランシスコ会のスペイン人修道士アロンソ・ムニョス師を派遣大使としてノヴィスパン、スペインへと送ります。日本語を巧みに操るソテロは聖職者には珍しく野心家の一面があり、アベルーサは本能的に心中に野望を秘め、巧言令色を弄するソテロを嫌悪していたのです。

家康の大使として「ブエナ・ヴェントゥーラ号」及び「サン・セバスチャン号」でノヴィスパンに渡る機会を失ったソテロは、帰りの船を失ったヴィスカイノを巻き込んで、冷めた家康から政宗に近寄り交誼を得ます。記録によると1610年(慶長15年)に政宗は米沢城でソテロを引見しています。(一説には、ソテロと同僚の宣教師が政宗の愛妾の病を治し、報奨を辞退して政宗を感激させます。愛妾というのは政宗が朝鮮から連れてきた彼の地の姫様と云われています。)

遣欧使節の目的の第一義は「奥州国にカトリックの大教会を建立するについて、教皇の指導を仰ぐ」と云うもっともらしい理由でしたが、ソテロの野望は自身が日本布教の大司教に任命されることでした。この事は政宗に(無論、常長にも)打ち明けていません。

とにかくソテロは日本の正使(大使)としてノヴィスパンどころかローマに行くことが究極の目的だったので。従って派遣主宰者が誰であれ、遣欧使節派遣の真の企画、立案者はソテロでした。どうしてもローマ教皇から司教に任命してもらいたいソテロと、交易はしたくないが太平洋航路の避難港を確保したいノヴィスパン総督府の意向を背負ったヴィスカイノと、布教は許さないが銀の精錬技術とノヴィスパンとの直接交易を望む家康と、三者三様の思惑が交差して同床異夢の船が出ようとしていました。

アダムスの下でガレオン船建造を学んだ御船手奉行向井將監忠勝(“將監=しょうげん”は官名)の配下の船大工が参画して、ヴィスカイノが良港と断じた牡鹿半島月の浦でガレオン船の建造が始まりました。建造は4月から始まり約6ヶ月、10月初旬に完成したようです。船の建造費は全額伊達藩が負担して完成した船は500ト、長さ35m、幅10.8m、主樁31.5m、帆17.8m、用材は主に松と杉で、船名は前に触れたとおり、「洗礼者・聖ジョセフ=サン・ファン・パウティスタ号」と名付けられました。

出航が迫った1613年10月になって、突然ソテロが「ノヴィスパンとの通商交渉には、スペイン国王、さらにローマ教皇にも使節を送るべきである」と言い出しました。政宗も常長も大西洋を越えて奥南蛮(ヨーロッパ)までの派遣は考えていませんでしたが、立役者のソテロを欠いての使節派遣は出来ず、この期に及んではソテロの計画を飲むしかありませんでした。

10月28日、サン・ファン・パウティスタ号は政宗が派遣する使節団、宣教師、操船を担当するヴィスカイノとその船員、向井將監忠勝配下の水夫、及び商人、さらにソテロが乗り込ませた亡命志望のキリシタン信者数名を乗せてノヴィスパンに向け出航しました。航路は順調で92日の航海で翌年1614年1月28日無事アカプルコに到着しました。

ノヴィスパンの首都(メヒコ市)到着後、使節団は

奥南蛮(ヨーロッパ)組と居残り組に分けて、100名余りは1年3ヶ月の滞在で日本へ帰されています。メヒコ市に長い滞在は許されず、多くの士卒たちは常長の帰りをアカプルコで待つことになりました。

このあたりの模様は城山三郎氏の著作『望郷のときー侍・イン・メキシコ』に詳しい描写があります。小説ながら第二部では現地調査をしてサムライの末裔を追っています。また、遠藤周作氏の著作『侍』も小説の形を取りながらもほぼ史実に則して展開して行きます。「常長」に興味を持つ者にとっては必読の書と思われれます。

ソテロ、常長一行はメヒコ東海岸の港ヴェラクルスからスペインの軍艦サン・ホセ号で、キューバ・ハバナ経由スペインに向います。スペインでは大西洋側のカディス湾サンルーカル・デ・バラメダ港で小船に乗り換えてグアダルキヴィル川を遡上、コリア・デル・リオに上陸します。

ソテロの生まれ故郷のセヴィージャで表向きには大歓迎を受けますが、日本でのキリシタン弾圧の情報が届いて、禁教の異教徒の国からの招かざる客として総じて冷たい反応でした。使節団はスペインを離れ、



常長とサン・ファン・パウティスタ号

ソテロが目論んだローマ教皇との謁見に全てを賭けてイタリアに渡ります。ソテロの伯父等有力貴族の事前の根回しが効いたのか、ローマでは大歓迎を受け、教皇パウロ5世に拝謁を許されます。

ヴァチカン極秘文書館に収められている「ボルゲーゼ文庫」723巻313ページに「Voxy(=奥州?) Japone Idate Masamune」の記述があり、常長に同行したサムライの名も記録されています。曰く、滝野嘉兵衛、伊丹宗見、野間半兵衛、小寺外記、グレゴリオ・マチャス、佐藤内蔵丞、丹野久次、神尾弥治右衛門、山口勘十郎、佐藤太郎左衛門、原田勘右衛門、山崎勘助の姓名が記載されています。他に名のみ記載者が藤九郎、助一郎、茂兵衛、九蔵の4人で、合わせて日本人16名の氏名が残されています。

ともあれ、常長はカトリックの最高権威ローマ教皇パウロ5世とスペイン国王フェリペ3世に使節大使として会えたのですから、これは空前絶後の歴史的な快挙です。謁見を実現させたソテロの手腕は驚くべきものです。しかし、日本のキリスト教禁教令がすでに伝わっており、交渉の決裂は決定的になりました。

家康、政宗、ソテロの三者三様の野望を乗せた遣欧使節の夢は時代の浪に虚しく砕け散り、常長の渡欧巡見、太平洋、大西洋、二つの大洋踏破の行跡のみが一筋の光として輝いたのでした。

主君の密命を果たせず、失意のうちにノヴィスパンを離れ帰国の途に就いた常長ですが、途中のマニラでおよそ2年ほど足止めされます。マニラから長男の勘三郎(常頼)宛に手紙を書いています(唯一残っている常長の直筆です)。これには故国の母を気遣い、妻を案じる思いやりが切々と綴られています。静かな忍耐

と責任感が強い「不撓不屈の精神」を持っていた侍は、また人一倍愛情の篤い人でもあったのです。そして、家族が心配しないように、どん底にあった自分の苦難

を露ほども筆にしませんでした。その意味でも常長は稀有なサムライでありました。

### 波瀾万丈の登場人物たち

常長は1613年10月28日に牡鹿半島月の浦を発ち、7年後の1620年9月20日にマニラ、長崎を経て、望郷の想い叶って故郷仙台に帰りました。しかし、幕府の切支丹禁教政策のもと社会の表に顕れることなく、失意のうちに帰国の2年後、1622年に没したとされています。享年51歳（異説もありますが、禁教令のため殆どの日記や文書は伊達藩の手で廃棄されました）。

主君の伊達政宗は1636年、江戸伊達上屋敷にて病没（70歳）。大御所徳川家康は1616年駿府にて病没（73歳）。二代将軍徳川秀忠は1632年、江戸城西の丸にて病没（54歳）。大多喜城主本多忠朝は1615年、大坂夏の陣にて討ち死（33歳）。ウィリアム・アダムス（三浦按針）は1620年、長崎平戸にて病没（56歳）。ヤン・ヨーステン（耶楊子）は1623年、インドシナ（ジャカルタ）にて溺死（67歳?）。ロドリゴ・ヴィヴェロ・アペルーサは1636年、ノヴィスパン・オリサバにて病没（72歳）。セバアスチャン・ヴィスカイノは1624年、ノヴィスパン・アカプルコにて病没（73歳?）。フェリペ3世は1621年、スペイン・マドリッドにて病没（43歳）。パウロ5世（パウルス5世。第233代ローマ教皇）は1621年、ローマ・ヴァチカンにて病没（68歳）。常長と共に慶長遣欧使節の立役者、自身の野望のため家康、政宗をも言葉巧みに籠絡した、ルイス・カブレラ・イ・ソテロは1624年、長崎大村にて火刑に処され殉教（49歳）。

波瀾万丈の生涯を生きた彼らは来世に何を語るのでしょうか…?。そして、我々に何を語りかけるのでしょうか…?。

407年前に二つの大洋を越えてヨーロッパに足跡を残した英雄、サムライの常長像は世界に7体あります。国内の3体（①仙台市青葉城址、②大郷町支倉常長メモリアルパーク、③石巻市月の浦公園）と、海外の4体（④メヒコ・アカプルコ市カラバリビーチ日本広場、⑤スペイン・コリア・デル・リオ市カルロス・デ・メサ公園、⑥イタリア・チビタヴェキア市カラマッタ広場、⑦キューバ・ハバナ市デル・プエルト通り）の全部で7体です。

注：キューバの像のみ宮城教育大名誉教授土屋瑞徳氏の作で、他の6体は宮城県黒川郡大和町出身の彫刻家佐藤忠良氏の作品です。

常長と一緒にスペインを去った一行は5名ほどです。渡欧した29名中、スペイン南部のコリア・デル・リオに残ったサムライの末裔が「ハポン（Japón＝日本）」姓を名乗って今では600世帯ほど居るとのこと。翻ってメヒコのアカプルコには100人以上が残留させられて、日本へ帰れたのは僅か数名。だとすればサムライの末裔は2千世帯以上居てもおかしくないですね。

「サン・ファン・パウティスタ号」の一回目航海の復路は1615年4月にアカプルコを出航して、同年8月に浦賀に入港しています。家康の命でアペルーサと共に「ブエナ・ヴェントゥーラ号」でスペインに派遣された大使のアロンソ・ムニョス師は病気のためメヒコで療養していました。復命代理使節として幕府のキ

リシタン追放令にも拘らず副王の命で、フランシスコ会修道士ディエゴ・デ・サンタ・カタリーナ、バルトロ・デ・ブルゴス、ファン・マテュテの3名にスペイン本国の返書と贈り物を持参させます。しかし、家康は会見を拒否、秀忠も贈り物も受け取らず、拘禁されていた宣教師共々即刻退去するよう命じました。

常長の配下の侍、商人たちも受洗の有無に拘らず上陸を認められず、追放命令を受け再びノヴィスパンへと引き返させられてしまいます。故国を目の前にして帰れない無念、無残な思いは如何ばかりでしょう!。またまたの3ヶ月余の長い航海で多くの乗員が命を落としました。

僅かな文献によるとアカプルコへの途中立ち寄った港のティントケ（Tintoque＝ハリスコ州とナジャリ州の州境＝今のプエルト・ヴァジャルタ辺り）、またサラグア（Salagua＝コリマ州マンサニージョ付近）、さらにサカトゥーラ（Zacatula＝ゲレロ州とミチョアカン州の州境＝今のラサロ・カルデナス近郊）で、日本人が殆ど下船したとあります（辛い思い出の地アカプルコには戻りたくなかったのでしょうか…?）。アカプルコ市のあるゲレロ州には「クロダ」とか「イスミ」とか「マツキ」などの姓があるし、メヒコ北部のミチョアカン州、ハリスコ州の町にも「ヤマダ」、「カトウ」、「フクチ」などの姓が残っています。現地人が裸足に履く皮製のサンダルを「ワラッチェ＝わらじ?」と呼んでいます。メヒコではサムライの末裔?が分散して歴史の中に埋もれた所以かも知れません。何か悲しく、興味深い話しですね!。



「サン・ファン・パウティスタ号」は日本とノヴィスパンの間を2度航行しています。一度目は常長使節の牡鹿半島月の浦出航1613年10月で、帰路は1615年4月アカプルコ発。二回目は常長を迎えるため浦賀湊から1616年9月に

サン・ファン・パウティスタ号(復元船) 出航してアカプルコ発は1618年4月で、常長等に乗せてマニラまで航行しています。マニラ着は1618年8月で、その後スペイン艦隊に組み込まれて対オランダ海戦に就役させられました。後にオランダの砲撃によりマニラ沖で沈没したと記録されています。

この時代、科学的な気象、海象が体系化されてなく、地理情報が乏しい時代。当時の航海士たちは経験的に季節風、貿易風を察知して出港時期を判断していました。日本からメヒコへの往路航路は9、10月が適時、順調であれば、メンドシーノ岬まで約2ヶ月、さらにアカプルコまで北風とカリフォルニア海流に乗って南下、おおよそ3ヶ月で到達します。復路はフィリピン周辺の気象の状態を逆算して適時の4月頃にアカプル

コを出航すると、南下しながら北赤道海流に乗って約2ヶ月でフィリピン（マニラ）に到着。さらに8月以降の台風を避けるため7月までに黒潮海流に乗って日本へ向かう必要がありました。ガレオン船交易は往路9、10月、帰路4月の出航は必然だったのです。

「慶長遣欧使節」に纏わる伊達政宗、支倉常長の研究は米沢鷹山大学（市民大学）市民教授の竹田昭弘先生が長く携わっておられるので、この後は竹田先生の研究レポート「立石の暁星“支倉常長”の考察」に委ねます。

## 結びに

今と云う時代は自分が生きているからではないでしょうが、いい時代だと思います。何故でしょう？歴史研究を通して先人たちの足跡を学べるからです。

徳川幕府が成立する17世紀初め、秀吉のキリシタン政策を踏襲した家康は中国、オランダとの交易とは別に、フィリピン、ノヴィスパン（メヒコ）のスペイン副王領との交易に前向きでした。現に三浦半島の浦賀湊を一時スペイン船の来航に提供しました。しかし、



日西墨比貿易港之碑  
(東浦賀・東叶神社)

その後のキリスト教の禁止令、鎖国令などの影響で、1609年の御宿でのアベルーサー一行の救出、送還。また1613～1620年の「慶長遣欧使節」の派遣。これらの史実も215年間の鎖国時代の歴史に表れず埋もれてしまいました。

これらの史実は後年、明治維新後に岩倉使節団（1871～73年）がイタリアのヴェネチアに残る文献で知らされるまで、日本では“歴史の闇”の中だったのです。すなわち、1871年12月23日から1年10ヶ月の長期間、明治新政府が欧米に派遣した岩倉具視を特命全権大使とする視察団（薩摩、長州出身者を中心とする使節46名、随員18名、留学生43名）がイタリア、ヴェネチアを訪れた際、同市の古文書館に保管されていた常長（長経）の書状により岩倉等は258年前の事実を初めて知ったのです。明治の時代になってようやく歴史研究の陽の光が当たりました。

もう一つ、以前から気になっていた事があります。歴史小説の大家司馬遼太郎氏の作品の中に何故か「常長」はほとんど登場しません。僅かに『街道をゆく』シリーズの第26巻「嵯峨散歩・仙台・石巻」で数行触れています。この小文を引用、紹介してこの稿を閉じます。

「街頭に彫刻的な時計もある。青銅と赤銅で側がつくられていて、時計の下に小さな三体のブロンズの像が、ちょこんと置かれている。どうやら伊達政宗が欧州に派遣した使節支倉常長（1571～1622）の像らしい。かれは1615年（元和元年）、フランシスコ会士ソテロの案内でローマに入り、教皇パウロ五世に拝謁した。この三体はそのときの光景をあらわしているようである。

三体のうち、パウロ五世はイスに腰をおろしている。神父ソテロはひざまずいている。常長は大小を帯びたままつつ立っているのである。

記録によると、常長は謁見の間に入ると、まず入口でひざまずいたらしい。ついで教皇の脚下にすすみ、その足に接吻するのだが、それをモチーフにすると、卑屈にみえる。

つぎの段階において常長が立ち、使節の意図を語る場面がある。さらに政宗の書翰を捧呈し、ソテロがこれをラテン語に訳して教皇につたえる。その光景をモチーフにしたのであろう。街頭の小ぶりの装飾としてはじつに気のきいたものだ。」

(司馬遼太郎著『街道をゆく』第26巻)



仙台市東一番丁商店街の街頭時計(部分)

(完結)

\*\*\*\*\*

### お知らせ

昨年10月、皆さまにご協力をお願いしました日墨協会支援CFにつき謝辞と感謝状が本会宛ありました。日本からの支援者は306人、支援額は4,749千円です。ご支援有り難うございます。

### ご支援くださった皆さま

拝啓

時下、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。この度は、COVID-19の影響下にも拘わらず、弊協会のクラウドファンディング企画に対し心のこもるお言葉やご支援を頂戴し、心から感謝申し上げます。我々理事一同は、ご支援の方々の御心に応えさせていただきたくございます。また、歴史ある日系人のシンボリック的存在であるこの協会をなんとしても、次世代そして末永く後世へと引き継ぐ覚悟でございます。

### 日墨協会支援クラウドファンディングへのお礼

本プロジェクト進捗状況等に付きましては、プロジェクトページ「活動報告」にてご報告いたしますので、下記のURLにて是非ご覧いただければ幸いです。 <https://camp-fire.jp/projects/view/309516> 末尾となりますが、皆様方の益々なるご健勝とご多幸をお祈り申し上げます。引き続き弊協会に対し、ご支援を賜れば幸いです。ご支援いただいた皆様方に対し感謝の意を申し上げます。誠に有り難うございました。



敬具  
2020年10月27日 社団法人 日墨協会 会長 中村 剛

## メキシコから新型コロナ禍の成田入国体験記

アミーゴ会メキシコ代表 遠藤滋哉

ANA 便は 12 月 8 日(火)、定刻より若干早く 06:20 に成田着。メキシコ市月曜発の NH179 便はドリーム・ライナー (B787)で、169 席の約 26%=45 人ほどの乗客でした。INTtoINT(国際便)の乗り継ぎ乗客は Q.I.C. (入国手続き)が不要なため直ぐに降機。日本入国者 30 名弱は、検疫職員の就業時間に合わせるためか? 30 分ほど機内待機してから降ろしてもらえました。

長〜い廊下をターミナル(第一) 端の検疫所まで(おそらくここは武漢肺炎ウイルス=新型コロナウイルス感染症対策のため設えた検疫カウンターの前に) 延々と移動させられます。7 月の帰国時には検疫所はもっとイミグレーションに近かった! しかし、長時間座ったままの身には良い運動です。

機内で配られた厚生労働省の検疫問診票を提出、降機した順番に、QR コードで事前申告した人は番号札(これが陰陽性を告知する検体特定番号)をもらい検体採取を受けます。私と妻はスマホを持っていないので、PC コーナーで自己健康診断をパソコン入力(15 分くらいかかる)。さらに空港からの公共交通機関不利用の誓約および使用交通手段の申告、14 日間の待機居所申告などを入力、プリントアウトしたものを検疫官に提出してから、ようやく PCR 検査を受けます。

検体採取は番号を記入した試験管(小さい漏斗が付いている)に約 1 ml の唾液を落とし、すべて自身で蓋をして備え付けのステンレス籠に置きます(検査前なので他の人への感染を避けるため)。面白いのは唾液を出しやすくするために?、「梅干し、レモンの輪切り」の写真(もちろん、実物は無い!)が大きく貼ってあるのです。後は検体採取番号順に待合スペース(椅子 2 席づつ空けて)で結果発表まで約 30 分待ちます。5 人づつ番号が呼ばれて検査結果の告知を受けます。幸い私達は陰性でした。もし陽性反応が出た場合は、別室でさらに詳細な検査を受けた後、再び陽性なら政府指定の医療機関に隔離されるようです。

検疫で放免された後は、入国審査と税関手続きは変わりありません。税関内にある到着後免税店は休業です。今は検査結果が直ぐに出るので、空港 3 階に設けられた待合室(7 月帰国時には飲み物、サンドイッチ等の軽食が用意された)での待機はありません。

ヴェトナム人やネパール人などアジア系外国人のスタッフ(申告通りの交通手段=家族出迎へのマイカー、ハイヤー、レンタカーの利用確認要員:付け馬?)は付いて来ませんでした。PCR 陰性無罪放免の身になったとは云え、厚生労働省の要請(指定感染症二類の強制=ほぼ義務付け)は、ゆるゆるですね。これでは荷物を宅配便で送って身軽になった後、素知らぬフリでバスや電車を利用して誰も分かりません。こんなことならいっそのこと、全面入国禁止(鎖国)にするべきです。こんなザル規制は止めた方がイイと思います。

私と妻は予約してあったレンタカーを故郷の米沢まで利用しました。レンタル料金は 1 日 ¥8,000 ほどと安いものの、乗り捨て料に東北六県はスタッドレスタイヤ装着義務追加料金が足されて ¥34,000 とかなり掛ってしまいました。最終的には高速道路料金+ガソリン代を加えて合計 6 万 2 千円でした。

成田空港を午前 9 時に出て、一緒に着いた友人を日本橋のホテルに降ろしてから東北道を福島に向かいました。途中、蓮田と吾妻の SA で休憩して 15 時に帰り着きました。ヤレヤレの道中でした。

到着 3 日目に地元保健所から成田検疫所連絡としてメールで、健康問診、経過観察、待機要請が届きました。すなわち、健康観察期間の 12/22 までに発熱等体調不良があれば保健所感染症予防担当まで連絡せよ。特に問題なければ通常の生活に戻して構わないとのことでした。(了)

【編集部注：遠藤メキシコ代表に“最新版”の成田入国体験記のご寄稿をお願いしました。氏は 1 月 7 日発 ANA 便で帰墨されましたがメキシコ入国時は体温測定のみだったとのことでした】

\*\*\*\*\*

### 私の本棚“TEXCOCO Y LA CONQUISTA DE MEXICO”

井上幸孝・専修大学国際コミュニケーション学部教授(メキシコ歴史文化講演会 2019 年第 1 回講演会講師)より標記タイトルの論考(西語)の案内がありました。メキシコの一般読者向けに執筆されたとのこと。ご関心ある方はご一読ください。メキシコ国立自治大学歴史学研究所(IIH-UNAM)の「メキシコ征服 500 年」の下記サイト(Noticonquista, 2020 年 11 月 30 日更新)で閲覧できます。

☆<https://www.noticonquista.unam.mx/amoxitli/2445/243>

### メキシコ映画紹介 “ミッドナイト・ファミリー”

メキシコ市で私営救急隊を家業にする一家のドキュメンタリー。1 月 16 日から上映。サンダンス映画祭米国ドキュメンタリー特別審査員賞受賞。ルーク・ローレンツェン監督。2019 年製作。米国・メキシコ合作。

☆公式 HP：<https://www.madegood.com/ja/midnight-family/>

### メキシコ映画紹介 “セノーテ・Cenote”

ユカタン半島の泉セノーテの神秘に迫るドキュメンタリー。現世と黄泉の世界を結ぶセノーテを巡るマヤの人々の過去と現在の記憶を紡ぐ。小田 香監督。第 1 回大島渚賞受賞。2019 年製作。日本・メキシコ合作。

☆公式 HP：<http://aragane-film.info/cenote/>

あとがき：恭賀新年。COVID-19 禍が世界に拡がり、日本ではお年玉が二度目の緊急事態宣言発令となりました。一日も早い収束と静穏な日常の到来を期待します。不要不急の外出自粛要請を前に、吾人には必要喫緊の最小限行動があるぞよ。夜の会食が否ならば、昼間の飲食は問題なしかとうそぶく編集子。などと拗ねている間に「新年号」も漸く発刊に漕ぎつけました。プリア大使はじめ各位のご好意に重ねてお礼を申し上げます。引き続き、会員の皆さまのご投稿を鶴首します。目下の感染拡大下、新しい日常生活を強いられます。どうぞご自愛ください。[20210111 か]